

子どもの自己有用感を高める学級活動の在り方

～人を思いやる表現やスキルの育成を通して～



高千穂町立高千穂小学校
教諭 馬原 巧平

子どもの自己有用感を高める学級活動の在り方

～人を思いやる表現やスキルの育成を通して～

I 主題設定の理由

今の子どもたちやこれから誕生する子どもたちが、成人して社会で活躍する頃には、我が国は厳しい挑戦の時代を迎えていると予想される。生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会構造や雇用環境は大きく、また急速に変化しており、予測が困難な時代となっている。

このような時代にあって、子どもたちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことが求められている。さらに、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくことが重要な世界となってきている。今後、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすることが学校教育には求められている。そのような中、平成29年3月に改訂された学習指導要領の特別活動の目標の中に、「集団に社会の形成者としての見方・考え方を働かせ、様々な集団活動に自主的、実践的に取り組み、互いのよさや可能性を発揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決する」ことを通して資質・能力を育むことを目指す教育活動とある。これは、望ましい集団活動を通してよりよい人間関係を築くとともに、豊かな人間性や社会性、自立性を備えた児童を育てることを目指したことによるものである。本県でも、『学校教育の指針』の重点取組の中に、「いのちを大切にす教育」の推進を目指し、「いのちにかかわるまわりの人・ものに感謝する子ども」の育成を目指すとある。

本学級の児童は、係活動や当番活動を一生懸命に取り組み、役割を意識し行動できる児童が多い。しかし、これまでの人間関係に悩み、いつも同じ友達と関わる傾向にある。友達と意見の食い違いがあった際、自分の意見があるものの、人から反対されないように本音をぶつけることができない場面も見られる。また、授業では失敗を恐れて発表に対して、消極的になる児童も少なくない。また、自らの主張ばかりになってしまい、相手の意見を聞くことができない児童もいる。児童が自他共に尊重しながら思いを素直に表現したり、集団の中で力を発揮したりするために、互いに認め合う関係を築き、児童の自己有用感を高めることが必要である。自己有用感とは、自己の所属する集団の中で、自分がどれだけ必要で大切な存在であるということをも自分自身で認識する感覚のことである。この認識は、他者からの評価が前提としてあり、自分の存在が価値あるものと思える環境にすることが必要である。つまり、そのためには、自分の「役割」と居場所（児童にとっては、学級）が必要である。児童同士が共に行動する中で、「大切にされた、役に立っている、褒めら

れた」と感じることで、友達を信頼し、思いを素直に表現したり、自信を持って発表したりすることができるようになる。そこで、学級活動において、児童同士が互いに認め合ったり、学級の諸問題に対して、全員で課題解決に取り組んだりすることができる活動を展開しようと考えた。

本研究を進めていくことによって、日常の生活の中で、互いの意見を大切にしたり、振り返りで互いに認め合ったりすることで、児童は、「大切にされた、役に立っている、褒められた」と感じることができ、児童の自己有用感が高まると考える。さらには、本校の教育目標である、「たくましく、心豊かで、自ら考え行動する児童を育成する」の具現化を目指していきたい。

II 研究の目標

- 互いの良さを伝えあう活動や学級の課題を解決し、心情の安定を図る実践を通して、より良い人間関係を築き、自己有用感の高まった児童を育成する学級活動の在り方を究明する。

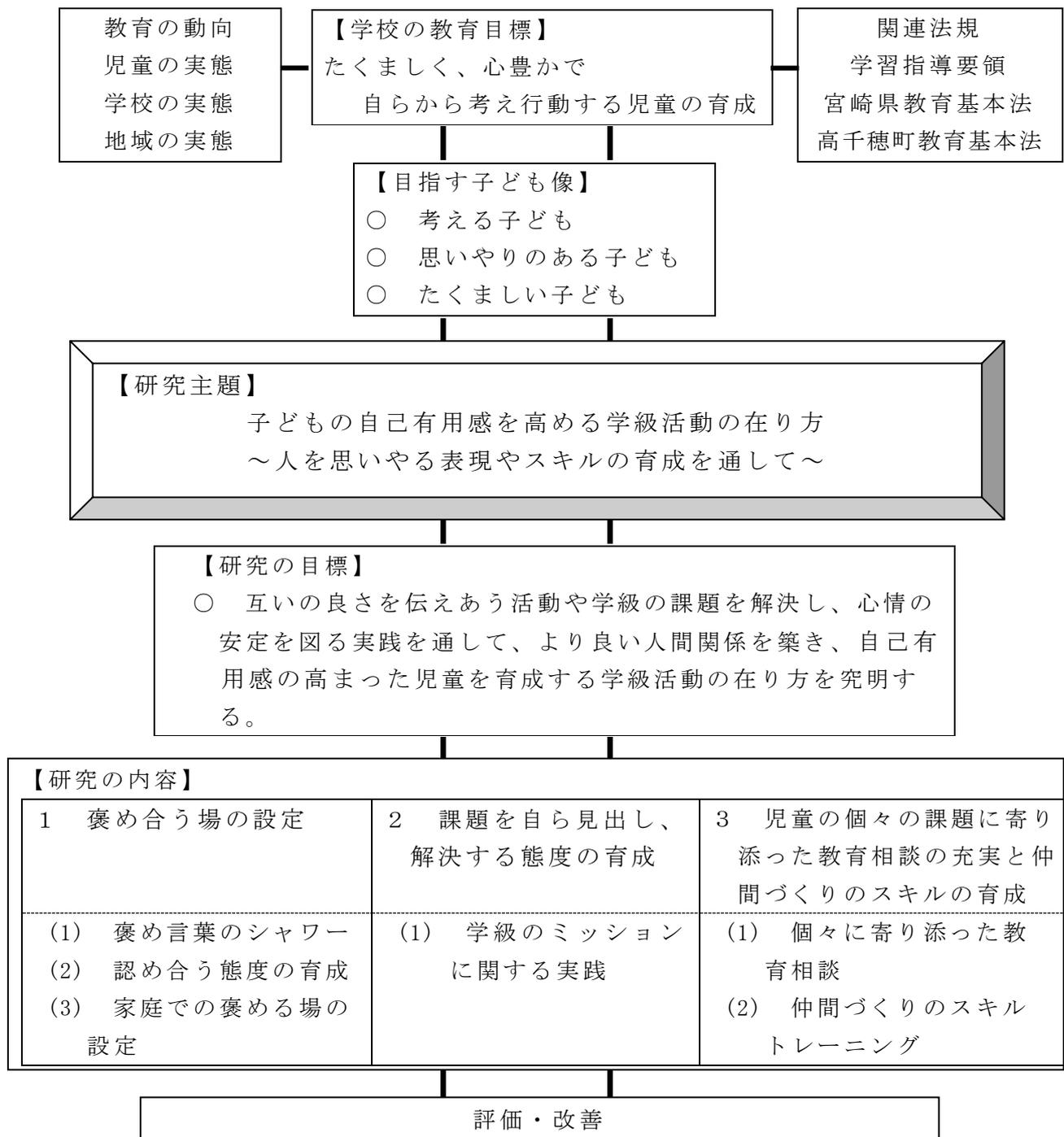
III 研究の仮説

- 児童が互いに褒め合う場の設定や認め合う態度の育成を行うことで、安心して学校生活を送ることができるであろう。
- 学級の課題を児童自らが見出し、解決を行うことにより、児童が安心して、学校生活を送り、自己有用感を高めることができるであろう。
- 児童の個々の課題に寄り添った教育相談の充実と仲間づくりのスキルの育成を図ることで、自己有用感を高めることができるであろう。

IV 研究の内容

- 1 褒め合う場の設定（褒め言葉のシャワーと学級へ波及するための実践）
- 2 課題を自ら見出し、解決する態度の育成（学級のミッションに関する実践）
- 3 児童の個々の課題に寄り添った教育相談の充実と仲間づくりのスキルの育成

V 全体構想図



VI 研究の基本的な考え方

1 自己有用感について

自己有用感とは、他人の役に立った、他人に喜んでもらえた、人から認められた等のように、相手の存在があって、自己の良さを見出すことを指す。本研究においては、児童が様々な学級活動において、自分が必要で大切な存在であるということを自分自身で認識する感覚のことであると考えている。

2 人を思いやる表現について

学級の中に困っている人がいたら声をかけたり、係活動や学習活動において、友達と協力して活動したりすることとする。

3 褒める合う場について

本研究では、児童が日常的に褒め合うことができるような、場の設定を行うこととする。数名の児童を、それ以外の児童で具体的に褒めるという活動を行う。褒められる児童が「学級のために頑張ったよかった」と実感できるように、周りの児童は、褒める材料を具体的に見つけて述べる、いわゆる褒めるスキルの獲得を目指す。そのために、褒め合う場の設定の在り方を工夫して行っていく。

4 学級の課題を設定について

児童にとって、学校生活大半を学級で過ごす。その学級の人間関係の醸成を図るために、成就感や自信、所属感が高める共通の体験が必要であると考え。学級全員が同じ目標をもち、課題解決を図ることで、互いに高め合う場の設定を行う。本研究では、学級における課題解決を通して、支援する活動を行っていく。

VII 研究の実際

1 研究内容1について

(1) 褒め合う場の設定

4月当初児童に接した際に、大変人懐っこい面や明るく談笑する児童が多いように思えた。ところが授業になると引っ込み思案になったり、自分の意見を堂々と発表できなかつたりする面が見られるようになってきた。そこで、児童が互いに支えられる集団になるための基礎として、褒め合う場が必要だと考えた。

前年度においても、褒め合う時間を帰りの会に設定していたという引き継ぎを受けているが、本年度は児童がより主体的に褒め合えることができるように、「褒め言葉のシャワー」として、次のように進めた。

- ア 導入の在り方
- イ 児童の反応や変容

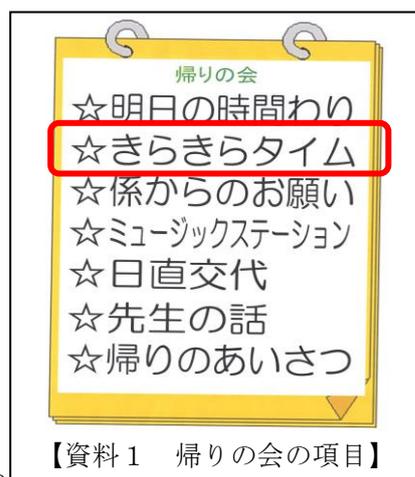
ア 導入の在り方

帰りの会の中で設定するようにしたが、そのやり方にいくつかのルールを設けた。

- 日直の1日の行動を観察する。
- 日直の頑張りを言葉で伝える。
- 必ず褒める。

上記の3つのルールで5月からスタートした。

日直の2人が仕事の様子で頑張っていた行動やクラスのために頑張っていた行動を周りの児童が見つかる。その後帰りの会で「きらきらタイム」というコーナーを設け、頑張りを言葉で伝え合う活動を行った。自分が行動したことに対して、学級の友達から褒め言葉をもらうことでうれしい気持ちになると考えた。



【資料1 帰りの会の項目】

イ 児童の反応や変容

メッセージを書いた相手に対して、「気付いてもらってうれしい。」というような言葉を贈る活動を行った。そのことが、自分自身の行動を良い方向へ価値付けることになった。そのため、もっと誰かのために行動しようという意欲を高められてきた。また、2学期からは、褒め言葉を付箋に書いて、掲示物に貼りつける方法へ変更した。掲示物に褒め言葉が残ることにより、友達の頑張りを上手に表現できた児童の文章を取り上げ、褒める視点を広げることができた。【写真1】



【写真1 褒め言葉を書く児童】



【写真2 メッセージを貼る様子】

メッセージを書いてもらった日直の児童は、贈られたメッセージを読み、とても嬉しい様子であった。褒め言葉のシャワーの取組を続けることで、初めはどのように褒めてよいか分からなかった児童も、友達の褒め方の視点を真似して、褒めることができるようになった児童もいた。また、もらったメッセージを読み、うれしそうに返事の手紙を書いていた児童もいた。メッセージの内容は、日直の仕事を一生懸命にしていた姿、困っていたときに助けられて嬉しかった言葉などがあった。

これらのメッセージを付箋に書いて壁面に貼り付けていき、いつでも見られるようにした。すると、ある児童は、メッセージカードに書かれた良い行動を、翌日以降別の児童に対して行い、自分自身の行動に自信をもつことができるようになった。このことから、メッセージを贈られてうれしいと感じるところで終わるのではなく、学級の友達に自分自身の気持ちを贈り返すことで、自己有用感を自分自身で認識できたと考えられる。

(2) 認め合う態度の育成（わたしメッセージに関する授業実践）

ア 実践授業 学級活動

実践授業では、学級活動（『わたしメッセージで伝えよう』）の単元を通して、自分の気持ちが友達に上手に伝えることができるような、スキルトレーニングを行った。わたしメッ



【写真3 役割演技の様子】

セージ（肯定的〔アサーティブ〕気持ち）を意識した表現をする交流活動を設定した。役割演技を行う際に感じたことを伝え合う場面では、肯定的（アサーティブ）な言い方と攻撃的（批判的）な言い方で感じ方を比較させた。その後、児童同士の活動で、肯定的（アサーティブ）なわたしメッセージのよさに気付くことができるようにした。また、わたしメッセージを意識して表現し合うことで自己有用感が高まっていくと考えた。

実際の指導過程を以下に示す。

| 段階 | 時間 | 学習内容及び学習活動 | 指導上の留意点 ・児童の反応 | 資料・準備 |
|----|-----|---|--|------------|
| 導入 | 5分 | 1 自分が言われていやだと思う言い方について話し合う。 2 本時の課題を確認する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 5px auto;">自分や相手を大切にしたい言い方を考えよう。</div> ・流れの確認 | ○ チクチク言葉を振り返り、攻撃的な言い方は相手を嫌な気持ちにさせることを気付かせる。 ・嬉しくない。 ・嫌な気持ちになったことがある。 ○ 本時のゴールイメージを確認し、見通しをもって取り組めるようにする。 | チクチク言葉の掲示物 |
| 展開 | 20分 | 3 人権教育指導資料の教材文「そう言ったのはだれ？」を読み、それぞれどの対応がされているのかを考える。 (1) 文を読み、主体的な言い方、受動的な言い方、攻撃的な言い方のどれに当てはまるのかを考えさせる。 (2) 全体で確かめる。 4 意見が分かれたところを話し合う。（ペア→全体） 5 自分と相手を考えた言い方について話し合う。 | ○ 主体的な言い方、受動的な言い方、攻撃的な言い方について説明する。 ○ 困っている友達がいたら、一緒に考えるように促す。 ・言われたら納得できる。 ・分かりやすい。 ・同じ状況があった。 ・悲しい気持ちになる。 ○ 意見がまとまらないときは、教師が補足説明するようにする。 ○ 主体的な言い方が望ましいことを理解させる。 | ワークシート |
| 終末 | 20分 | 6 例題について考え、役割演技を行う。 (1) 例題の主体的な言い方を話し合う。 (2) 実際に役割演技する。 7 本時のまとめをする。 | ○ ペアで実際に伝えあったときの気持ちを考えさせる。 ・わたしメッセージなら、次からはしたらダメと納得できそう。 ・気持ちが伝わりやすいと思う。 ○ 3つの言い方の違いを再確認し、これからは主体的な言い方をしていこうとする意欲を高めさせる。 ・これから意識して、わたしメッセージをつかっていきたい。 | |

イ 児童の反応や変容

授業を行う前、わたしメッセージで表現する児童は少なく、相手に対する要望が多かった。しかし、授業後は、わたしメッセージを意識し、自分の気持ちを言葉に織り込み、相手にどうして欲しいのかを考えた上で、相手に気持ちを伝える児童が多くなった。初めはどのように伝えてよいか分からなかった児童も、友達の伝える様子を真似し、自分の気持ちを伝えることができるようになった児童もいた。また、わたしメッセージを意識して褒め言葉のシャワーで書く様子も見られた。

(2) 家庭での褒める場の設定

ア 学級通信を活用した家庭での褒め言葉のシャワー

自己有用感を育むために、保護者と情報を交流して子どものよい面を見つけることが必要である。子どもの良い面を生かせる環境づくりも大切である。家庭内でお手伝い等を行い、活躍させることで子どもの自己肯定感が高まると考える。そのため、家庭の協力が必要である。そこで、参観日の学級懇談の中で、家庭で親子褒め言葉のシャワーを紹介し協力を願った。

☆今週のキラリ人☆
さん

理科の授業が早く終り、「花だんの草抜きに行こう」と提案してくれました。花だんに着くと、草抜きと花のたね取りを夢中になってしていました。

さん、きっかけの言葉、ありがとう！！

【資料2 学級通信の今週のキラリ人】

(児童顔写真)

実践に当たり、次の3点に気をつけて行ってもらった。

- ① スキンシップを通して、温かい言葉かけをする。
- ② お手伝いの場を作る。
- ③ ほめる、励ます、認める言葉かけを行う。

その上で、学級通信の内容に、児童の学校での頑張り（今週のキラリ人）を掲載し、家庭で話し合えるように話題提供を行った。

イ 児童の反応や変容

学級通信に掲載された児童から、「お母さんからたくさん褒められた。だから、お手伝いを頑張った。」と報告があった。保護者から学校での頑張りや褒めてもらうことで、家庭でも自分自身の価値を見出すことで、家族のために手伝いをしようという意欲を高めることができると考える。

また、担任からも認められる事で児童との信頼関係の構築にも効果があった。個に応じた言葉かけを心掛けていると、学校生活の中で、子どもと言葉のキャッチボールがしやすくなる。子どもは、「先生は、ほめてほしいと思うことを褒めてくれる」「先生は私のことを認めてくれる」という気持ちになり、先生から大切にされている価値のある一員だと思えるようになったと考えられる。

2 研究内容2について

(1) 課題を自ら見出し、解決する態度の育成

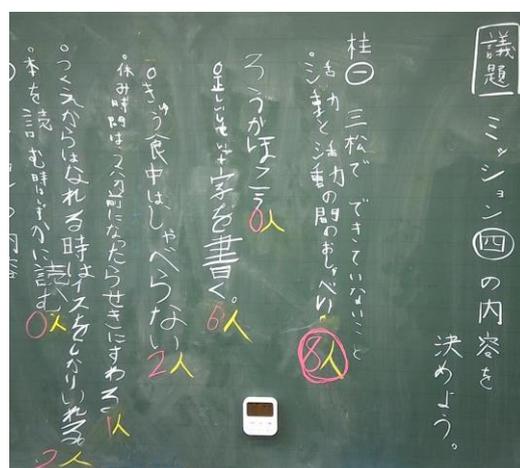
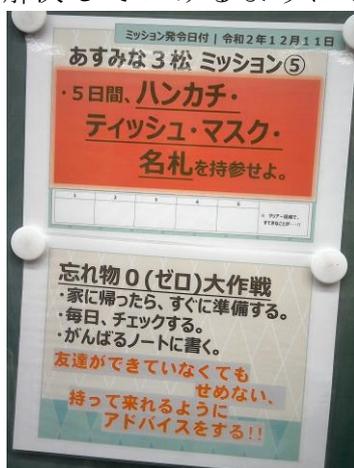
4月当初、本学級は、日直の仕事をきちんとしたり、係活動の仕事に対して、一生懸命に取り組んだり、やるべきことはきちんと行っているように思えた。6月に行ったアンケートの「わたしは、みんなと協力して係活動や学習活動を行っているか。」の項目では、89%の児童が「思う・まあまあ思う」と答えていた。ところが、学級全体で見ると、学級の課題を見出せずにまとまりがあまり感じられなかった。また、アンケートの「わたしは、クラスの大切な仲間の一

人だと思ふ。」の項目では、「思う・まあまあ思う」と答えた児童は44%しかいなかった。そこで、児童が互いに支えられる集団になるための基礎として、学級の課題を児童自らが見出し、解決を行うことで、自分達の力で「やればできる！」という成就感と自信を獲得することができる考えた。その中で、児童が学級への所属感を高め、安心して学校生活を送ることができる考えた。具体的には、次の通りに行った。

「あすみな3松ミッション」

- ① 学級活動の時間に、学級の課題を話し合う。
- ② 課題から、ミッションの内容を決める。
- ③ ミッション達成のための作戦を決める。
- ④ 達成のために評価と改善を行う。
- ⑤ ミッションを達成したら、お楽しみ会を行う。

約2か月に1回のペースで、ミッションを決めて、段階的に課題を自ら見つけて、解決していけるようにした。



【資料3 3松ミッションの掲示物】

【写真4 3松ミッションの話合いの板書】

(2) 児童の様子や変容について

2学期の後半になると、児童から「次のミッションに挑みたいです。」という、前向きな姿勢が多く見られ、自主的に活動する児童が増えてきた。また、アンケートの「わたしは、クラスの大切な仲間の一人だと思ふ。」の項目で、「全く思わない」と答えた児童は減少した（6月は5人→12月は2人）。児童が互いに声を掛け合ったり、支え合ったりし、成就感と自信を獲得することができるようになってきたと考える。

3 研究内容 3 について

(1) 児童の課題について

研究を進めるに当たり、児童の実態を把握するために、栃木県総合教育センターが実施した「ふだんの生活や思っていることに関するアンケート」を参考に自己有用感アンケート（資料4）を3回実施した。これらのアンケートを通して、学級集団と児童における自己有用感に関する意識と行動の変容を考察した。これらのアンケート結果と担任による観察を基に、友達との関わりが少なく、自分の気持ちを表現したり行動に移したりすることにつまづきが見られる児童2名を対象児童として抽出した。これらの児童については継続的に観察することにした。

(2) A児の課題への対応

A児は、自分の気持ちを表現することが苦手である。友達との関わりの中で、強い口調で伝えてしまい、トラブルになることが度々あった。

そこで、本校で月1回行われる教育相談（ハートフルタイム）を活用し、適宜行動の振り返りの時間を設けた。その際に、次のようなことに配慮した。

- 児童が、友達とよりよい関わりができた時は褒める。
- トラブルがあったときは、わたしメッセージで伝える

このような実践を行うことで、本人の行動が改善され、意欲が高まるように支援した。また、保護者に定期的に連絡を行い、共通理解を図りながら、支援を行った。

(3) A児の変容

A児は、アンケートの「わたしは、クラスの人に支えられている。」の項目で、6月は「あまり支えられていない」と答えていたが、12月は「支えられている」と変容した。また、家庭学習の作文では「言葉遣いに気をつけて、友達に優しい言い方をできるようになった。」と記述していた。日常の行動を観察しても、困っている友達に対して、「大丈夫」と共感する場面が多く見られるようになった。このことから、定期的な教育相談を取り入れたことで、A児は主体的に友達に関わるができるようになってきていると考えられる。

(4) B児への課題の対応

B児は、言動が穏やかで何事にも一生懸命に取り組むが、自分の気持ちを表現することが苦手である。休み時間に自分から友達を遊びに誘うことが少なく、人間関係づくりにおいて、受動的な部分が多い。そこで、係活動を中心としたスキルトレーニングや適宜教育相談を設けた。児童は、整理整頓係のリーダーとして活動しており、係の友達とよりよい関わりができている。日常の係活動の中で、

3松きらきらアンケート

3年松組 () 番・名前 ()

12月

☆ このアンケートは、ふだん思っていることやしていることをふり返って書えてください。

| | | あてはまる考えを○でかきみましょう。 | | | |
|---|-------------------------------|--------------------|----------------------|----------------------|-----------------------|
| ① | わたしは、クラスの人と仲良く立っていると思う。 | 思う | まあまあ思う | あまり思わない | まったく思わない |
| ② | わたしは、クラスの大切な仲間(なかま)の一人だと思う。 | 思う | まあまあ思う | あまり思わない | まったく思わない |
| ③ | わたしは、クラスの中にまいった人がいたら助けてあげる。 | する | まあまあする | あまりしない | まったくしない |
| ④ | わたしは、クラスの人の手伝いをすることがある。 | する | まあまあする | あまりしない | まったくしない |
| ⑤ | わたしは、みんなと協力して係活動や学級活動を行っている。 | する | まあまあする | あまりしない | しない |
| ⑥ | クラスには、わたしのことを分かってくれる人がいる。 | いる | まあまあいる | あまりいない | まったくいない |
| ⑦ | クラスの人から、「ありがとう」と言われることがある。 | ある | まあまあある | あまりない | まったくない |
| ⑧ | わたしは、クラスの人から、ほめられることがある。 | ある | まあまあある | あまりない | まったくない |
| ⑨ | わたしは、クラスの人に、支えられている。 | 支えられて いる | まあまあ 支えられて いる | あまり 支えられて いない | まったく 支えられて いない |
| ⑩ | わたしは、クラスの人と喋り合っている。 | する | まあまあする | あまりしない | しない |
| ⑪ | クラスの友達に、話を聞いてほしい時に私の話を聞いてくれる。 | 聞いてくれる | まあまあ 聞いてくれる | あまり 聞いてくれない | まったく 聞いてくれない |
| ⑫ | クラスの友達に、わたしに話しかけてくれる。 | 話しかけて くれる | まあまあ 話しかけて くれる | あまり 話しかけて くれない | まったく 話しかけて くれない |
| ⑬ | 自分にはよいところがあると思う。 | 思う | まあまあ思う | あまり思わない | まったく思わない |

☆ アンケートに書えてくれてありがとう。もっともっと好きな3松にするようにがんばっていきましょう。おうえんしています。

【資料4 きらきらアンケート】

そばに寄り添い言葉かけを行い、児童が安心して係の友達と関われるようにスキルトレーニングを行った。できたときは褒め、うまくいかなかったときは、行動を振り返り支援を行った。また、褒め言葉のシャワーの掲示物を視覚的に確認し、安心感をいただきながら、生活できるように声かけを行った。

(5) B児の変容

B児は、係活動では、整理整頓係のリーダーとして、教室後方の個々の児童のロッカーを整理するために、整理整頓コンテストを考えるなど、自信をもって、係活動に取り組む姿が増えた。また、以前と比べて、自分から友達に話しかけたり、遊びに誘ったりするなど、積極的に友達と関わる姿が多く見られるようになり主体的に友達に関わることができるようになってきた。



【資料5 係活動の発表の様子】

VIII 研究の成果と課題

1 研究の成果

- 褒め言葉のシャワーのメッセージを常に読み返すことができるように掲示として、蓄積していった。自分自身の行動を振り返り、友達からのメッセージに励まされ、自信をもち行動できるようになってきている。メッセージの内容の変化からも分かるように、友達を日常的に褒めるスキルが身につけてきている。自己有用感を継続してもたせることにつながった。
- 様々な場面において、学級の課題や個人の課題に向けた行動が見られるようになってきた。そして、児童が互いに声を掛け合ったり、支え合ったりし、成就感と自信をもって、行動できるようになってきたと考える。
- 抽出した児童は、主体的に友達に関わることができるようになってきている。また、学級全体としても、所属感が高まり、安心して、人間関係づくりを行う児童が増えていると考える。

2 今後の課題と展望

- 自己有用感を高めてもしばらくすると下がってしまうことから、互いのよさを伝え合う活動を意図的・計画的に継続して行う必要がある。
- 複雑な家庭環境にある児童もいる。家庭での自己有用感を高めるために、学校と家庭が相互に連携して、子どもを見守り育てていくことが大切である。今後も家庭への啓発活動も必要である。

IX 参考文献

- ・ 東洋出版社（平成29年）文部科学省「小学校学習指導要領解説 特別活動編」
- ・ 文部科学省国立教育政策研究所 生徒指導リーフ18
- ・ 栃木県総合教育センター（平成25年）の自己有用感尺度質問紙
- ・ 宮崎県教育委員会 人権教育指導資料 -社会教育-
- ・ 日本標準（平成31年）菊池省三「小学校発!一人ひとりが輝くほめ言葉のシャワー」